

近代以降の博多川・那珂川周辺における水辺利用の変遷についての研究*

Study on Transition of Waterfront Use in Hakata and Nakagawa River*

宮崎 大**・樋口明彦***・高尾忠志****

By Hiroshi MIYAZAKI** Akihiko HIGUCHI*** Tadashi TAKAO****

1. 研究の背景と目的

近年、各地で河川空間を都市における貴重なオープンスペースとして見直す動きがある。また、平成9(1997)年の河川法の改定により河川行政は、それまでの治水・利水に加えて「環境保全」「住民参加」をキーワードとした河川整備を進めるようになった。しかし、実際に都市河川が、生活の場のひとつとして利用されている事例は未だ少ないのが現状である。

日本の都市の多くは河川周辺に発達してきた経緯がある。また、京都の鴨川や江戸の隅田川に代表されるように、都市の水辺は古くは納涼の場や舟運利用など、人が立ち入り様々な活動が展開される場であった¹⁾。

本研究は、都心の中心部に二本の河川が流れ、都市の発展と河川での水辺利用に関係が強い、福岡市博多川及び那珂川を対象に、江戸時代から今日までの水辺利用の変遷とその要因を明らかにし、今後の河川整備に有用な知見を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

図-1に博多川・那珂川の位置及び、調査対象地区を示す。那珂川及び、那珂川水系準用河川の博多川は、大型商業施設が集積する天神を中心とした福岡部と、歴史的な地域である博多部の境界に位置し、今日、沿川地域には川端商店街やキャナルシティ博多、博多リパレインなどの商業施設が集積している。

博多川及び那珂川とその周辺の歴史、土地利用の変化を、文献資料、古地図、絵図、写真等から把握した。また、地域に長く住み戦前の様子に詳しい方(6名)に対して近代以降の状況についてヒアリング調査を行った。

*キーワード：都市河川、景観変遷、水辺利用

**正会員，九州大学大学院 工学部 研究生

(福岡県福岡市東区箱崎6丁目10番1号

TEL092-641-3131 (8677), FAX092-642-3309)

***正会員，Dr. of Design，九州大学大学院工学研究院

(福岡県福岡市東区箱崎6丁目10番1号

TEL092-641-3131 (8677), FAX092-642-3309)

****正会員，工修，九州大学大学院工学研究院

(福岡県福岡市東区箱崎6丁目10番1号

TEL092-641-3131 (8677), FAX092-642-3309)

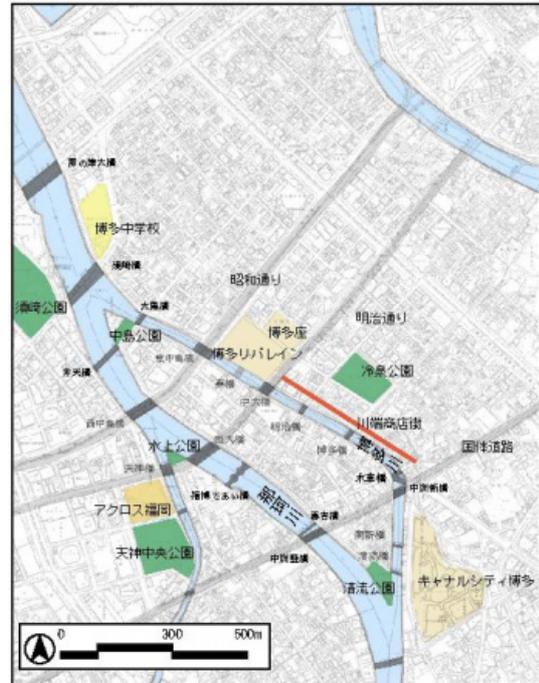


図-1 現在の博多川・那珂川
(平成10年測量図より筆者作成)

3. 既往研究

都市河川沿川の活動の変遷に関して、田中ら²⁾は京都伏見における水辺の近代化を対象として、舟運により保持されてきた都市機能やアメニティが、近代化により水辺の工業基盤機能が卓越するようになった結果、都市アメニティを享受する場としての水辺の分布が散漫になったことを明らかにしている。

吉村ら³⁾は、城下町都市における水辺空間の変容について、都市の発展過程が水辺に与えた影響という点からアプローチし、交通体系の変化や水利用体系の変化がその原因であることを明らかにしている。

4. 博多川・那珂川における水辺利用の変遷

博多川・那珂川沿川の土地利用変遷は、大きく以下の5つに区分することができる。

(1) 河川により隔たれたまち(江戸時代～明治20年)

1601年、現在の中洲がまだ潮の満ち干きで見え隠れしていた頃、黒田藩が福岡城(現在の大濠公園周辺)を築く際に博多部と福岡部を繋ぐために中洲の一部を整備し、那珂川に西中島橋、博多川に東中島橋を架けた。この整

備により博多川の歴史が始まったとされる⁴⁾。

同時に福岡部の那珂川沿いには背の高い石壁が築かれ、那珂川が外堀のような役割を担うようになる。また、西中島橋の入口には枳形門と呼ばれる門が築かれ、福岡部への立ち入りが規制された。

一方、博多川沿いはまだ現在のように川縁に家が並んだ形ではなく、博多川に開けた形で人家が建っていた。その後、1700年頃より博多川に背を向けた人家が建て込んでいき、片側だけのまちであった川端町も両側のまちとなった⁵⁾。

また、那珂川、博多川は感潮河川であるとともに、上流部からの土砂流入も多いため、舟運機能を十分に果たさなかった。そのため、那珂川河口に『商海』と呼ばれる入江構造の港が作られ、その周辺には舟運で生業をたてる問屋が軒を連ねていた。

博多川沿いに水車が架けられ、漁をする川舟も見られる。近世のころ、博多川は今よりも川幅が広く、45mほどあった(現在は約20m)。東中島橋の右岸橋詰には、広場が設けられており、掲示板が設置されていた。博多川が武家町の福岡との接するところにあつたため、情報の集まる場として利用されていたと考えられる。

また、枳形門により福岡部への移動が困難であったためか、文献の記述や絵図からは那珂川での活動はほとんど見られない。この頃、水辺の活動の中心は博多川であったと考えられる。

(2) 福岡部と博多部の境界の消失(明治21年~明治41年)

明治に入ると、福岡部と博多部を隔てていた枳形門及び那珂川沿いの石垣が撤去され、それまで自由に行き来することが出来なかった博多部から福岡部への移動が可能となり、中洲が発展し始める。料亭や芝居小屋も始まり、織工場、精錬所などの工場も中洲に置かれた。

明治20年に行われた第五回九州沖縄八県連合共進会は、東中洲で行われ、博多部の発展を促進させる一つの要因となった。共進会のため、東中洲に西洋建築の共進館と福岡クラブが建設された。これを契機に中洲は目覚しく発展を遂げていく。

一方、同時期の福岡部に関して言及すると、福岡部那珂川沿いに明治40年福岡日日新聞社が移転、その他に銀行や電信局、鉄道事務所、また県庁や市役所も立地し、福岡部の官庁街が完成していったのはこの頃からである。

明治30年向島が完成する。改修工事は26年から開始され、改修区域は瓦町の入口、鉢の底橋から住吉橋にいたる博多川沿いである。護岸工事が終わると、桜や柳が植えられ、現在も残る高灯籠の初代のものはこの時設置されている。

共進館の南の那珂川沿いには、共進会に向け、料亭街が誕生した。それぞれが川縁に建てられたが、川に面した客室があり、川の眺めを楽しむことができた⁶⁾。明

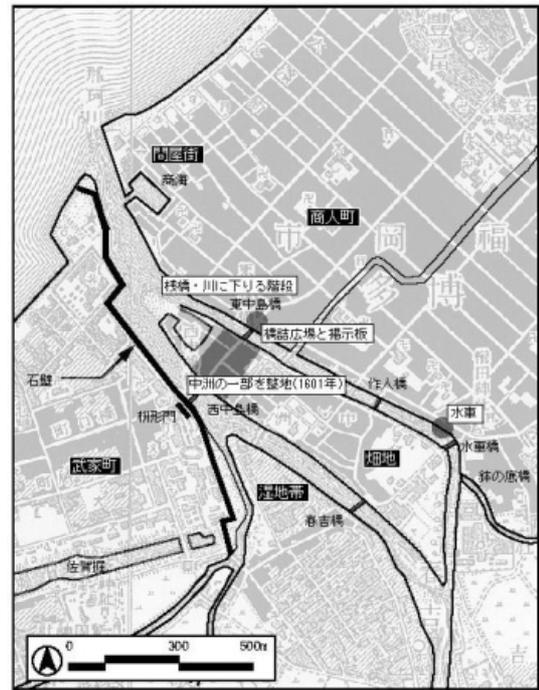


図 - 2 : 河川により隔てられたまち (明治33年測量図より筆者作成)



図 - 3 : 福岡部と博多部の境界の消失 (明治33年測量図より筆者作成)



図 - 4 : 第五回共進会絵図(福岡市博物館資料)

治 37 年ごろの写真(写真 - 1)では、中洲那珂川沿いの西中島橋付近に立看板があり、前面の遊歩道には多くの人が集まっており、日常的に水辺空間を利用していたことが伺える。

博多川では、明治 39 年、中洲にある電燈会社十周年時に、橋や客船に電燈装飾が施され、水辺を利用した催事が行なわれた。

(3) 福岡部の発展(明治 42 年～昭和 19 年)

明治 42 年第 13 回九州沖縄八県連合共進会が、福岡城の外堀として残っていた佐賀堀を埋め立てた場所と、まだ開発されていなかった西中洲で行われる。また、現在も西中洲に残っている県公会堂貴賓館は、明治 42 年、共進会のために建設された貴賓館であった。さらに、博多部に福博電気軌道が設置される。福博電車は、明治 43 年の第 13 回共進会の会場に合わせて開通した。

中洲の那珂川沿いでは、大正 12 年、福岡部に向けた広告塔が立ち、那珂川をはさんだ往来が盛んになってきたことが分かる。また、西中洲に東宮殿下御成婚記念事業として、大正 13 年水上公園が完成している。河川に面した公園としては、福岡で初めてのものであった。

また、大正 13 年、那珂川沿いにアサヒビール園が開店。さらに大正 14 年、福岡市で最初の本格的なデパート・玉屋呉服店が同じ電車通りの東中洲・博多川沿いに開店している。

当時の東中洲が歓楽街として栄え始め、那珂川沿いには料亭が建ち並んだ。前述の通り、川に面した客室を持つものばかりであり、東中洲博多川沿いにも、川丈旅館など、水辺に面したものが建っていた。この頃の博多部の博多川沿いは、今のように川に背を向けた形で商店が並んでいたが、店は通りに向けて、生活スペースは川側を向いて造られており、写真からは川に下りる階段なども確認され、生活で川を活用していたことが分かる。

ヒアリングによると、戦前、護岸は石垣で、その石垣を登る遊びや、石垣の間に隠れている魚などを採るのを楽しむ子供たちの姿があった。博多川及び、那珂川の水深は低く、潮の満ち干に影響される感潮河川であったため、潮が引くと砂浜の洲が現れ、遊び場としてもっとも良いところであったという。

昭和期に入り、川岸にかきを食べさせる‘かき船’が繋がれた。‘かき船’は広島牡蠣の業者が出向いて始めたもので、大正末から昭和 2、3 年頃には 4 艘の‘かき船’が繋がれており、春になると店を閉じていたが、かき船は一年中河岸につながれていたため、その様子は当時の河川景物の一つになっていた。

昭和 9 年、那珂川沿いにカフェ・ブラジレイロが開業した。そこには川沿いに突き出したテーブルがあり、文化人を始め、多くの人に利用されていた。

ヒアリングによると、春吉橋の横には二間半(約 4.5m)程の幅の広い階段があり、下には石畳が敷かれてあった。



写真 - 1 西中島橋と立看板(福岡市博物館資料)

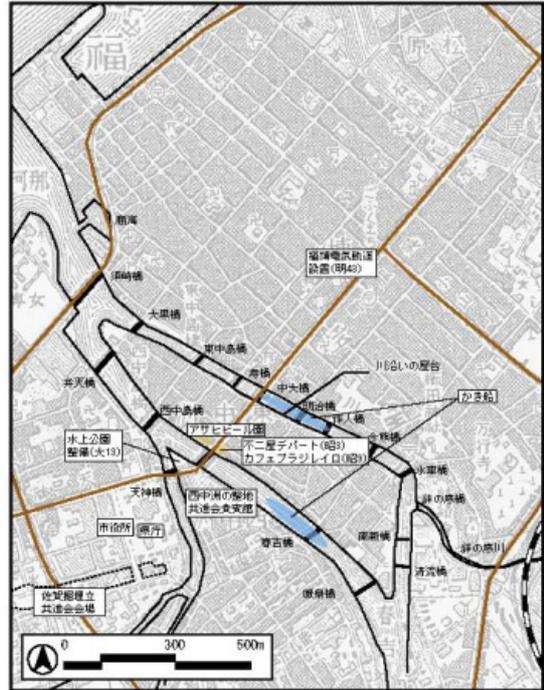


図 - 5 : 福岡部の発展
(昭和 23 年測量図より筆者作成)

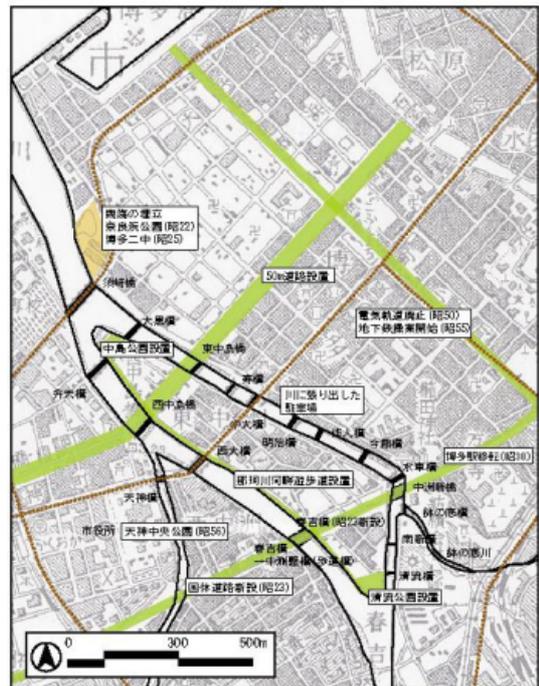


図 - 6 : 戦災復興と都市の発展
(昭和 25 年測量図より筆者作成)

そこで周辺の住民は障子などを洗っていたそうである。那珂川の春吉付近は、家族ぐるみで遊びに行くことも多く、砂浜に下り、水遊び、魚釣り、野球までしていたそうである。

(4) 戦災復興と都市の発展(昭和20年～平成2年)

昭和20年福岡大空襲により、博多部及び中洲の大部分が焼失した。その後、博多部にあった寿通り商店街は福岡部に移転するなど、博多部から福岡部への市街地の变化も見られる。戦災復興区画整理事業により、昭和23年、50m道路(昭和通り)が新設され、中洲には中島公園、清流公園、那珂川河畔の遊歩道が設置された。

昭和47年に戦災復興区画整理事業が完工し、県庁が東公園に移転したため、跡地に天神中央公園が整備された。また、天神中央公園と同時に計画された福博プロムナードは、福岡部と博多部を東西に貫くものとして計画され、天神と中洲を繋ぐため、福博で古い橋が平成元年に架けられた。昭和63年には、博多埠頭と都心を結ぶ骨格軸となる那珂川河畔プロムナード整備が始められた。また、このプロムナード整備の進展に合わせて、プロムナードの起点となる清流公園と中継点となる中島公園の改修もなされている。

一方、博多川では、昭和38年、河川空間に張り出した駐車場が設置された。この当時、川端町側の水辺に張り出した不法建築も目立ち始め、博多川の環境は悪化していった。

また、博多川の水質に関しても悪化が見られた。博多川に直接流れ込む鉢の底川上流の工場立地、下水道の問題などにより博多川は汚染が進み、川端喘息とよばれる病気が広まるほどひどくなっていた。この頃には、遊び場や生活の中での博多川の水辺利用という意識はなくなっていたと考えられる。

昭和40年、博多川対策専門委員会が設置され、ポンプ場や下水道の整備などにより、博多川の水質は改善されることになる⁷⁾。

(5) 現在(平成3年～)

平成3年に「博多川夢回廊整備事業」が始まり、高水敷や階段護岸の整備が行われ、博多川の両岸にはプロムナードが設けられた⁸⁾。

また、周辺にはキャナルシティ博多(平成8年)、アクロス福岡(平成8年)、博多リバレイン(平成11年)など、博多川・那珂川沿いに大型商業施設が開業した。

しかし、現在博多川に向けて商業展開している商店は4軒しかなく、依然として川に背を向けた建物がほとんどとなっている。プロムナードでは日常的に利用する市民の姿は見かけられない。

5. まとめ

福岡市都心部の河川における水辺利用の変遷とその周辺の都市形成を以下まとめる。

江戸時代には、博多川がまちの境界として使われており、自然と情報収集の場として橋詰が利用されていた。水辺に関しては水車や漁、または納涼船という形で利用されており、生活の場として博多川があったことが分かる。那珂川に関しては、中洲にまちが形成されていなかったため、那珂川での水辺利用はほとんど行なわれていなかった。

明治期には中洲が発展していく中で、那珂川での水辺利用が始まり、料亭街が那珂川沿いに建てられた。博多川沿いでは、水辺に下りる階段が設けられていることから、生活に密着しており、日常的に利用されていた。福岡部の西中洲が発展し、人家が建つようになると、那珂川では障子洗いや遊び場などのように、生活の場としての利用がされるようになった。

戦後、中心市街地が博多から天神へと移ったことにより、中洲と博多部の間を流れる博多川よりも、プロムナードが完成した那珂川に水辺利用は集中している。また、博多川は水質汚染により水辺利用されにくい状況になった。以前のように水辺に下りることのできる階段はなく、河川空間に張り出した不法建築が建ち、博多川での水辺利用はなくなった。

現在、博多川夢回廊事業によりプロムナードが完成したが、博多川を日常的に利用する市民の姿はほとんど見られない。それには、利用されていた時代と比べ、中心市街地が福岡部に移ってしまったこと、戦災や水質汚染を経て、博多川沿いの建物が川に背を向けてしまったことが要因として考えられる。

以上の変遷から水辺利用に影響を及ぼす要因を抽出すると、周辺の土地利用の変化、都市構造の変化、水質汚染が挙げられる。

参考文献

- 1) 篠原修編：都市の水辺をデザインする，彰国社，2005
- 2) 田中尚人，川崎雅史：京都伏見における水辺の近代化に関する研究，土木計画学・論文集，Vol.19，no.2，pp.331-338，2002
- 3) 吉村敏弘，瀬口哲夫：城下町都市における水辺空間の変容に関する研究 第25回日本都市計画学会学術研究論文集，pp403-408，1990
- 4) 咲山恭三：博多中洲ものがたり前編，文献出版，1979
- 5) 小田部博美：博多風土記，海鳥社，1969
- 6) 橋詰武生：明治の博多記，福岡地方史談話会，1971
- 7) 福岡市水道局：福岡市下水道史 福岡市下水道局，1995
- 8) 福岡市下水道局河川部河川建設課：博多川夢回廊事業パンフレット